

**■芽から花へ ー実践の花開くー**

本校では昨年度から「表現力・コミュニケーション力を高める指導方法の工夫」を研究主題に掲げ、学年または個人ごとに研究の視点と手だてを設定して研究に取り組んできた。今年度は3年次研究の2年次であることから「手だての明確化」を目標とし、全校授業や一人一研究授業を通して多様な実践を出し合い、教科・領域の特性や学年の実態に応じた指導方法の工夫を探ってきた。

まず、4月3日に第1回研究推進委員会を開き、研究の方向性や見通しについて話し合った。具体的には、学年または個人ごとに教科・領域を選択して研究を進めることと、今年度は要請訪問を実施せずに全校授業を複数回行うことなどを確認した。また、昨年度の課題である「縦の系統性の必要性」については、研究主任が作成した「表現力・コミュニケーション力の学年系統表(案)」を吟味・検討しながら実践に役立てていくこととした。

次に、4～5月中に学年または個人ごとに具体的な研究計画を立て、6月20日の研究全体会で発表し合った。ポスターセッション形式にしたことで、全職員で校内研究についての考えを深めて交流するよい機会となり、その後の研究実践に役立てることができた。

そして、6月から1月にかけては、教員全員が一人一研究授業を実践した。今年度は7月までに6つの研究授業が行われるなど、昨年度以上に意欲的な取組が見られた。また、学年の実態に応じて様々な手だてが工夫され、1年次研究の成果を生かした深まりのある実践となった。(「Ⅱ 研究実践」参照)

それから、10月31日には東北福祉大学から上條晴夫先生を講師としてお招きし、校内研修会を開催した。「授業成立の基礎技術」というテーマで、「学級崩壊で出てきた子どもの不安の正体」や「最近教師の注意が通りにくくなった理由」について、上條先生の鋭い分析をもとに具体的に指導していただいた。また、五七五作文の模擬授業を通して、「見守る」「言葉かけ」「笑い」「フォロー」など、児童とのコミュニケーションにおいて大切なことを体感的に学ぶことができた。(「Ⅴ 資料編」P.11～13参照)

さらに、12月には全校授業を2回実施した。5年2組の国語の授業では、高学年にふさわしく、「ごみ問題」についてのグループ討論が行われた。賛成派と反対派の立場から自分の考えを明確にして意見を述べ、さらに友達のよい考えを取り入れながら議論を深めている姿が見られた。本時の討論を通して、複数の意見を比較・検討するクリティカルシンキングがしっかりとされるなど児童が論理的に思考・表現しており、互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合うなど、望ましい言語活動の在り方が示された。

また、1年4組の国語の授業では、選んだ理由をはっきりさせてグループの友達に本の紹介を行った。「まんだらシート」や「おはなしカード」を効果的に活用することで、「結論ー理由ー結論」の3部構成で理由をふくらませて発表することが無理なくできていた。1年生の実態に応じてプレゼンテーションの基礎を丁寧に身に付けさせることで、表現力の向上はもちろんのこと、PISA調査で日本が弱いとされている論理的コミュニ

ケーションの力も高まっており、参観した教員全員が大きな刺激を受けた価値ある提案授業となった。（「Ⅲ 全校授業」参照）

なお、児童の意識調査については、全校児童を対象に5月と1月に実施し、昨年度と比較しながら表現力・コミュニケーション力に関する児童の意識やその変化の様子を探ることができた。（「Ⅴ 資料編」P.1～10参照）

2月9日の研究全体会では、前半にポスターセッション形式で学年または個人の成果と課題を発表し合った。他学年の研究授業を参観できなかった教員も、この発表を聞くことで実践の概要を把握することができた。また、質問や意見交換なども活発になされ、異学年の教員同士のコミュニケーションを深めるよい機会ともなった。後半には、個人ごと付箋紙に成果（水色）と課題（ピンク）を各3枚記入し、ホワイトボードに貼って分類・整理することで、今年度研究の成果と課題を共有化し確認することができた。

## ■研究の成果と課題 一手だての明確化ー

今年度研究の主な成果は、以下の通りである。

### □1 学びの環境を整える

#### ○場の設定の工夫

- ・発表用ホワイトボード（A3サイズ）や移動式ホワイトボードの複数利用は、児童の考えが伝わりやすく、学習の場ですぐに生かした。
- ・お互いの顔が見え司会者が中心になるような机の配置や広い多目的室の利用など学習活動の場の設定を工夫することで、ペアやグループでの話し合いに集中して取り組むことができた。
- ・児童同士が関わり合う学習場면을意図的・計画的に設定することで、コミュニケーションが活性化し学び合いが深まった。

#### ○学習形態の工夫

- ・ペア学習やグループ学習、ディベートなどを取り入れたことで、自分の考えを持って意見を交換したり、相手のことを思いやりながら学びを深めたりしている姿が見られた。
- ・教科の特性により学習グループを構成することで、教え合いや学び合いが活発になり、学習内容に応じた効果が見られた。
- ・算数の少人数グループでは、個に応じた指導・支援が容易にでき、児童も安心して発表や話し合いができた。

#### ○掲示物の工夫

- ・聞き方や話し方のポイントを教室に掲示することで、すべての学習場面で聞いたり話したりする時のめあてを意識させることができた。

### □2 学びの意欲を高める

#### ○題材や学習過程の工夫

- ・問題意識を高めるような題材を工夫することにより、児童が自分の思いや考えを明確にし、伝えたい気持ちを高めることができた。

- ・学習過程の中に児童が自分の言葉で説明したり学習感想を発表したりする機会を意図的に多く設けることで、表現することへの抵抗感が減り、自分の思いをはっきりと表現できるようになった。

#### ○ワークシートの工夫

- ・学習のねらいに沿ったワークシートを工夫することで、児童は自分の考えを整理し、自信を持って発表することができた。
- ・話型を書いたカードや簡単な台本の活用は、発表や話し合いの仕方、手順などを学ぶのに有効であった。
- ・自己評価カードや他者評価カードを活用することで、プレゼンテーションのスキルを高めていくことができた。

### □3 学びの日常化を図る

#### ○スピーチ

- ・朝の会や帰りの会でのスピーチを継続することで、自分の思いや考えを恥ずかしながら発表できるようになった。
- ・場に応じた声の大きさや語尾を意識した発表の仕方が身に付いた。
- ・スピーチの経験回数が増す度に語彙が増え、話の内容にも広がりが見られた。
- ・話の組み立てで、5W1Hを意識するようになった。
- ・聞き手はしっかり聞いて、質問することを習慣化することができた。

#### ○読み聞かせ

- ・毎日、帰りの会で本の読み聞かせを続けたところ、人の話を自分のこととしてしっかりと聞き、その場に応じた反応を示すようになった。

#### ○メモ

- ・国語でメモの取り方を習得し、理科の実験・観察や校外学習等で活用できた。

また、主な課題は以下の通りである。

- ▲個の変容を把握できる評価方法や学習シートの工夫
- ▲個に応じた指導・支援の工夫
- ▲めざす児童の姿の共有化
- ▲目的や視点が明確で児童の思考を促すワークシートの工夫
- ▲話し方パターン等スキルの系統化
- ▲グループでの話し合いを深める司会の役割の重要性
- ▲前年度研究の生かし方
- ▲他教科や日常生活との関連
- ▲学校全体での共通指導
- ▲学級の雰囲気づくり
- ▲言語環境を整えるための家庭との連携

## ■花から実を結ぶために ―変容の明確化―

次年度は、3年次研究のまとめの年として「変容の明確化」を目標に掲げ、児童の変容した姿をしっかりと見取っていきたいと考えている。そのためには、これまでの実践事例の蓄積を生かしつつ、新学習指導要領の主旨を踏まえての各教科・領域を通じた言語活動の充実が欠かせない。

そこで、研究主任が作成した「場面ごとのコミュニケーション目標」（次頁参照）を参考にして、目標を児童の行動レベルで具体化してみようことを提案したい。すなわち、児童に育てたい力を、達成目標や向上目標、体験目標として具体的にイメージすることは、指導課題や手だてを明確にして授業デザインを描くことにつながる。そして、具体の行動目標に照らし合わせながら学びの過程を丁寧に見取っていくことで観察記録が累積され、児童の変容を明確にとらえることができるようになるであろう。その際、学習集団としての変容と個人の変容を区別してとらえることがポイントとなる。また、目標の具体性・妥当性について事後評価し、常に修正を図っていくことを大切にしたい。

また、本校では新学習指導要領への円滑な移行を図るために、次年度から第5・6学年において週1コマの外国語活動を行うこととした。異文化理解を通して表現力・コミュニケーション力を育成するよい機会ととらえ、校内研修に位置づけながら全職員で授業研究や教材研究に取り組んでいく予定である。

なお、4月実施の仙台市標準学力検査においては、国語の「話すこと・聞くこと」の領域別正答率がどの学年も期待正答率を5～10ポイント上回り、前年度の同学年との比較でも全学年上回る良好な結果となった。一方、4年の国語辞典の使い方など言語事項に関する問題で、いくつか期待正答率を下回った。語彙力が不十分なために題意が理解できない児童も見受けられることから、国語辞典を一人一人が常に手元に置いて活用するなどの工夫・改善を図り、全ての教科・領域の基盤となる国語力を高め、言葉を正確に使う表現やコミュニケーションができるよう指導に努めていきたいと考える。

これまで2年間の研究を通して得られた成果や課題をもとにして、次年度は研究の視点をより焦点化・具体化して創意ある教育実践に努め、児童の変容をより明確にできるように研究に取り組んでいきたいと考える。

